

平成28年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT28305 プログラム名 「Happy Art Workshop in English! -いろんな素材をつかって  
作品をつくろう!-」



開催日: 2017年1月28日(土)

実施機関: 大分大学

(実施場所) (旦野原キャンパス)

実施代表者: 藤井 康子

(所属・職名) (大分大学教育学部・准教授)

受講生: 小学5・6年生 18名

関連URL: <http://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/topics/2016-073.html>

### 【実施内容】

**受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるために留意、工夫した点**

演習のための用具・材料については、安全面への配慮も含め受講生が英語も分かりやすく楽しく学べるように、関係者による綿密な準備を行ったため、当日の進行を円滑に実施することができた。演習への興味・関心を高め、内容を分かりやすく伝えるために、日本語と英語の両言語による映像資料とイラストを多用した配付資料を作成した。特別講師としてスペインから美術科教育を専門とするマリア・アカソ准教授を招聘し、本学の教員と学生及び附属小学校講師である友廣佳奈子氏以外にも、パストール・マタモロス・ソフィア氏(富山大学大学院人間発達科学研究科)をスタッフとして配置して、受講生が緊張することなく学べるように工夫した。

本プログラムでは、最初に研究代表者から科研費の説明を行った後、スライドを用いて御手洗靖教授から「英語と図工の協働学習について」、実施代表者から「英語も使って学ぶアート教育とは?」、マリア・アカソ准教授から「スペインの新しい美術教育の考え方～Art is thinking～」の講義を行った。専門用語や難しい英語表現を使わないことを心がけ、受講生に英語も使って図工を学ぶことの楽しさを感じることやその意義について考えることを促した。次の演習は4～5人のグループ活動で行うようにし、表現のトピックとして“日常生活の中で変えたいと思うこと”を考え、トピックに基づいた表現活動(ドローイング、様々な色や形の自然物や人工物をつかったインスタレーション、ボディパフォーマンス)を行った。後半には「スペインの文化や暮らし等をテーマとする国際交流(クッキータイム)」を行った。受講生にはアートと言葉(英語)を使ってマリア准教授に自分の思いや考えを伝える経験をしてもらい、多様な言語を表現手段として持つことの豊かさについて考えることを促した。閉講式では活動のまとめと全体講評を行い、受講生に修了証書を渡した。

### 当日のスケジュール

9:30-10:00 受付(教育学部棟2階 201号室前)

10:00-10:15 開講式(本日のスケジュールの説明、講師紹介、科研費の説明)

10:15-11:10 講義1「英語と図工の協働学習について」、講義2「英語も使って学ぶアート教育とは?」、  
講義3「スペインの新しい美術教育の考え方～Art is thinking～」

11:10-12:00 演習1「グループで表現のトピック“日常生活の中で変えたいと思うこと”を考えよう」  
演習2「トピックを色と形で表現しよう(ドローイング)」

12:00-13:00 昼食・休憩(担当教員および学部学生との座談会)

13:00-13:50 演習3「トピックを様々な材料を使って表現しよう(インスタレーション)」

13:50-14:20 クッキータイム(スペインの文化や暮らし等をテーマとする国際交流)

14:20-15:30 インスタレーション発表会、演習4「トピックを身体を使って表現しよう(ボディパフォーマンス)」

15:30-16:00 講師からの講評、修了式(アンケート記入、未来博士号授与)

16:00 終了・解散

### 実施の様子

9時20分頃より教育学部2階の201号室に設置した受付には、多くの受講生と保護者が集まった。予定通りにプログラムが始まり、今回の実施代表者である藤井康子准教授から科研費とスケジュールの説明、ゲスト講師及びスタッフの紹介と各グループ内での自己紹介(オリエンテーション)を行った。プログラム前半では、初めて顔を合わせた受講生の間にかなりの緊張感が漂っていたが、講師達からの講義が始まると美術教育の面白さ、そして英語を使って講師達と交流しようとする気持ちから少しずつ緊張がほぐれ、発言数が増えていき、沢山の笑顔と言葉が出されるようになった。多くの受講生にとって、表現のトピックを考えるという行為は初めての経験であったため、トピックの内容が決まるまでに予想以上の時間を要した。しかし、「毎日、全ての授業を図工にしたい」「政治家を子どもにしたい」「学校に冷暖房の設備をつけたい」「一日を24時間以上にしたい」といった興味深いトピックが考え出され、そこから身体表現も含めたアートによる表現の探究的な学びが始まっていった。

プログラム中盤(クッキータイム)には、スペインの小学生の生活やスペインの文化、特に食文化について参加者から多くの質問が出され、主にゲスト講師のマリア准教授が答える形で交流が行われ、講師達と受講生との間で文化の違いに対する理解が深まっていく様子を見る事が出来た。プログラム後半で行われたボディパフォーマンスでは、身体だけを使って(言葉を使わないで)相手にトピックの内容を伝えることに難しさを感じ、挫折しそうになった受講生もいたが、講師達が考え方や表現の仕方について根気強く伝えることにより、グループの皆と力を合わせて課題解決に取り組む姿がみられた。プログラム最後の活動のまとめでは、皆の前でグループごとに今日の学びについて短いプレゼンテーションを行った。人前で自分の思いや考えを発表することに課題が見られた受講生が、大変熱心にプログラムに取り組んだことを通して成長した姿を捉えることができた。一連の活動を通して、受講生は、多様な表現手段を駆使して国際的に活躍する将来の自分をイメージし、実現のために必要な経験・スキルとは何かについて認識することができたのではないかと考えられた。



「使用した材料:冬 naturally 物と人工物」



「講義1」



「講義2」



「講義3」



「演習2の様子」



「演習3の様子」



「演習3の作品」



「演習4の発表会の様子」

## 事務局との協力体制

日本学術振興会との連絡調整、委託費の管理、提出書類の確認、メディアへの情報告知、受講生への連絡、当日の進行、アンケートの回収・分析等の全てを事務局が担当したことにより、実施代表者は演習のための材料・用具の準備や講義内容の準備、資料作成等に集中することができた。

## 広報活動

本プログラムのチラシとポスターを作成し、近隣の小学校訪問時に配布しただけでなく、事務局を通して大分市の全小学校に案内を送った。また、近隣の社会教育施設を訪問し、ポスターの掲示をお願いした。地方新聞の宣伝欄にチラシの内容を載せ、宣伝活動を行った。

## 安全配慮

受講生18名に対して教員4名と簡単な英会話が出来る学生スタッフ3名、トリリンガルのスペイン人留学生(富山大学大学院生)が担当者として演習に付き添い、英語を使用する場面等での支援を行った。又、グルーガンやペンチ、金槌等の取り扱いに注意が必要な用具があったため危険が無いように配慮した。特にグルーガンやペンチ、金槌等の用具の取り扱いについては、担当する教員・スタッフが受講生の操作時に注意を促しながら始めるように安全に配慮した。部屋の換気にも配慮した。万一の場合に備え、参加者全員に対して傷害保険を契約した。

## 今後の発展性、課題

今回は、ゲスト講師の授業の関係で、当初計画の11月23日開催から大幅な日程変更をしなければならなかった。今後は講師達とより密に連絡を取り合い、場合によっては講師を変更するなどして予定通りの開催を目指したい。開催時期は小学生及び小学校教員ともに比較的余裕のある時期であったため、当初は25名の定員近くまで応募者が集まっていたが、開催当日間にキャンセルが続出して受講生は18名となった。結果的に受講生に対してきめ細やかな指導・支援が可能になったことから、受講生の定員数の見直しも行い、図工と英語の両方が更に充実した内容となるよう工夫・改善を図りたい。

プログラム内容に関しては、アンケートの記述内容にも見られたが、英語の使用場面が少なかったことが反省点である。本プログラムでは、英語を使用する必然性を生み出すために、スペイン人講師との国際交流を取り入れた。しかし、関係者らが想像した以上に、受講生にとっては英語を使った会話表現が難しい状況であった。小学校高学年が使いやすい英語表現をワークショップに多く取り入れる等して、受講生がより多くの英語表現に親しむことが出来るよう改善していきたい。また、今回は、マリア准教授とのコラボレーションによって内容を構想したが、考える活動や発表活動を多く取り入れた結果、自分の思いや考えを相手に伝える表現力や発信力、相手の思いや考えを分析的に見て理解しようとする鑑賞力に課題が見られる受講生に、明らかな成長がみられた。

今回が初めての開催であったが、受講生からは「工作と英語を両方楽しめたからよかった」「とてもわかりやすく面白かった」というアンケート内容が多くみられ、美術教育と英語教育との融合的な学習に対し関心を深めることができた。本プログラムは分担者、協力者及び大学事務局による万全の支援体制のお陰で開催することができた。今後も同様のプログラムを実施する場合には、スタッフの負担がこれ以上大きくならないようにする工夫をしていきたい。

## 【実施分担者】

御手洗 靖 教育学部・教授

【実施協力者】 6名

## 【事務担当者】

鴛海 椋太 研究・社会連携部 研究・社会連携課 研究協力第一係